

## 〈贈る言葉〉

### Sono 先生の劇 (的) 人生

玉田佳子

Sono 先生は嘱託講師時代も含めると33年間、同志社女子大学で教鞭をとってくださいました。実は私の記憶が確かなら、Sono 先生と私は同期入社だったと思います。新米の教師だった私は、英語講読のテキストの英語がわからないとすぐ Sono 先生のところに駆けつけ教えていただいていた。ある時、先生に、「最近あまり質問に来なくなったね」と言われ、そんなに頻繁に教えてもらっていたんだと思いながらも、Sono 先生のお顔の表情から、先生が、私が英語の教師として成長したとっていらっしゃるご様子がわかり、決して、実際はわからないまま教壇に立っても平気な図太さを身につけただけだということを明かすことはできませんでした。先生ごめんなさい。今でも、英語はわからないことばかりです。

Sono 先生の同志社女子大学でのご活躍は、なんと言ってもシェイクスピア・プロダクションの演出です。今年SPは62周年を迎えます。先生はそのうち13本のシェイクスピア劇の演出を手がけられ、SPの伝統を確実に未来へと繋いでくださいました。先生のご功績には感謝をするばかりです。またシェイクスピア劇は、演出する先生によって、様々な側面を見せてくれます。Sono 先生演出のSPは、品があり華やかでした。Sono 先生の普段の優雅な立ち居振る舞いが演出にも感じられました。

そのイメージが覆されたのが、1991年に同志社女子大学の新島記念講堂で上演された、*Shadowings* です。この劇は、Sono 先生がラフカディオ・ハーンの幽霊譚を元に劇用に脚本を書かれ上演されたものでした。同女の教員や学生も参加した *Shadowings* は、私の目にはとても前衛的で衝撃的な劇でした。普段見ていたシェイクスピアの古典劇とは違う、Sono 先生の才能の別的一端を垣間見た気がしました。

このように Sono 先生は、シェイクスピア劇の上演以外にも、ケイト・ショパン（1851-1904）やラフカディオ・ハーン（1850-1904）の小説について研究論文を書き、彼（女）らの小説を元に劇用の脚本を11本も書かれました。元となる題材があるにせよ、そこから新たに劇を作り出すのは、とてもクリエイティブな仕事であり、才能に恵まれ、本当に劇を愛する人にしかできないことだと思います。

さらに Sono 先生はシェイクスピア以外の劇の演出もたくさん手がけられ、学外の劇団の演出は16本にも及びます。主に府立文化芸術会館などで上演されました。

同女では、SP以外に、ゼミにおいても劇をテーマとされ、昨年度は、『ローマの休日』を劇として演出し、学生たちが立派に演じていました。実は Sono 先生自身が、ハイスクール時代に『ローマの休日』の主役イライザ役を演じていらっしゃいました。ハイスクールでイライザを演じた時代から（もしかしたら幼稚園児の頃からかもしれませんが）、Sono 先生の人生は、女優、脚本家、演出家と劇一色だったように感じます。もっとも Sono 先生の私生活については、やさしいご主人とお坊ちゃんたちがいらっしゃるということ以外ほとんど知りませんので、私の知らない Sono 先生の世界はもっともっと広いのかもしれない。

Sono 先生には現在、嘱託講師としてまだまだお世話になっていますが、少しはゆっくりする時間も持てるようになられたと思います。劇を鑑賞されるもよし、私の知らない世界に浸られるのもよし、どうぞこれからの人生も豊かに楽しんでください。本当に長い間ありがとうございました。